

# 強者の戦略

## 【第14回】英作文（上本）

### 前書き

さて、自分なりの解答例は用意できましたか？ 各所で「どう書けばいいんだろう」と頭を悩ませられ、唸ってしまう問題だったと思います。考えられる解答例はいろいろあるのですが、ここではひとつ僕の英訳例をあげてみたいと思います。訳例とその解説、という展開にしますね。

まず、今回の【問い】の確認です。次のような問題でした。

### 【問い】 次の和文を英訳しなさい

自分にとってぬきさしならない歌というのがあるのだ。その歌を聴いたことがじぶんの中の何かを変えたという記憶が、歌の向こうにのこっているような歌だ。聴いてすぐには気づかない。けれどもずっと後になってから、その歌だったのだと気づく。その歌が最初の歌だったのだと。その歌を聴くことがなかったら、それからずっとアメリカの同時代の歌に耳を澄ましつづけることは、あるいはなかったかもしれない。

上記の和文、僕なら次のように書きます。一つの解答例として参考にして下さい。

**I have in mind a song that had a dominant influence on me, the one which strikes me as the decisive factor in changing something in my mind. At the time, I was listening to it without immediate recognition of being influenced. But much later on, I came to realize that it was indeed the one with which I had made the first step. Had I not come across that song, I might not have been listening to contemporary American songs ever since.**

それでは各所でポイントとなる言い回しの分析をしていきましょう。以下の8点で、詳細に触れていきたいと思っています。

- 1 自分にとって～があるのだ
- 2 ぬきさしならない
- 3 ～という記憶が、歌の向こうに残っている
- 4 聴いてすぐには気付かない
- 5 その歌だったのだ
- 6 それからずっと
- 7 同時代の
- 8 あるいはなかったかもしれない

# 強者の戦略

## 1 自分にとって～があるのだ

最初に主語に何を置くか、という問題に当たりますが、ここでは「私」を主語にしました。もちろん一般人称の we を主語に置くこともできます。しかし文章の最後には私個人の話に移行してしているので、we で書き始めて、私個人の話に具体化するような展開を考えるよりは、**全体を通して私**の話として書ききった方が統一感を出せます。

また、「～がある」という言い回しには、後の展開を考慮して「～を思い出せる」というニュアンスを持つ **have O in mind** を利用しました。ただし、O が関係代名詞節を伴って長くなっているため、**have in mind [長いO]** という語順にしています。ある種の倒置構文ですが、基本発想は「長いものは後回し」になります。その例を3つ以下に挙げますね。

1. When people are repelled by the thought of clones, they usually **have in mind** [the creation of people of identical composition].

(クローン作成を考えたことに気分を悪くする時には、人々は普通、同じ組成を持っている人々を作り出してしまったと思うのである)

2. Most of us do not worship the Sun as did man in ancient civilizations, but we certainly should not **take for granted** [the light and heat that it provides].

(我々のほとんどは古代文明人たちのようには太陽を崇拝しないが、それが供給する光と熱を当然だと思っただけではならないことは確かである)

3. And in remembering his achievements, let's also **bear in mind** [the fact that Einstein was prepared to admit that he was wrong].

(そしてその業績を思い出す際にはアインシュタインが自分は間違っていると快く認めていたという事実も心に留めておこう)

目的語が 1. **of**句を伴った名詞の場合、2. **関係詞節**を伴った名詞の場合、3. **同格節**を伴った名詞の場合などは「長いO」として通例後回しにされます。

## 2 ぬきさしならない

この部分がかかなりの悩みどころだったのではないのでしょうか。第一文であることから、段落全体の内容を要約したような内容であることが分かりますが、それにしてもどう書くべきか、というところです。

「ぬきさしならない」という日本語自体は「身動き取れない」「どうにもならない」という意味の言い回しです。この意味を文脈に融合させて和文和訳すると、私に軽視できないほど「**多大なる影響を与えた**」で表現できます。「その歌を聴いた後の自分の音楽観に**支配的に**[最も権力的に]影響した歌」という意味になるように“**dominant**”という形容詞を選択しました。「身動き取れない」「どうにもならない」という日本語における束縛感や重圧感まで、“dominant”に含めています。

## 3 ～という記憶が、歌の向こうに残っている

まさに日本語らしい比喩的な表現になっています。ここで言いたいことを平明化すれば、「(思い返せば) **その歌が自分の中の何かを変えた(原因だ)と思いつける**」という内容になります。これを言い当てる表現を文法の授業で学習したでしょう

# 強者の戦略

か？ 動詞 strike を使って「思い当たる」と表現できますが、第5文型で S strike O as C という形があります。この構文で注意すべき点は、意味が「OにはSがCである」と思い当たる」となり、**第5文型でありながら例外的に[S=C]の関係になる**ということです。例文をあげましょう。

例) His reaction **struck** me as odd. (私には彼の反応が奇妙だと思えた)

また、remind O1 of O2「O1にO2を思い出させる」「SのためにO1はO2を思い出す」も思い付いた範囲の単語かも知れませんが、

**[その歌] remind me of [じぶんの中の何かを変えた]**  
S V O1 O2

と書いてしまうと、「その歌を聴けば、私はじぶんの中の何かを変えたことを思い出す」という訳になってしまい、[その歌=何かを変えた(原因)]という意味とは異なってしまいますね。正しくは、「歌の向こうに残っている」は「[その歌=何かを変えた(原因)]だと思いつける[記憶の中で残っている]」という和文和訳で考えます。

今回は[その歌 = the decisive factor(決定的な要因)]という関係で表現しました。factorに関する用法上の注意点ですが、factorに続く前置詞はinなので、**a factor in A「A(結果)における要因」**というフレーズで覚えておいて下さい。

例) The increase in the unemployment rate is **an important factor in the fall** of the U.S. dollar.

(失業率の上昇がドル相場下落の有力な要因の一つである)

## 4 聴いてすぐには気付かない

ここには省略されている語句がありますね。実際、「I do not realize as soon as I listen.」では不十分です。的確に情報伝達できる文に必要な要素を揃えるために、省略要素の復元をしていきます。まず、「聴いてすぐ」の目的語はもちろん「その(ぬきさしならない)歌」ですね。また、「気付かない」の目的語を辿ると、「自分がその歌に影響を受けた(その結果その歌を最初にしてその後のアメリカの同時代の歌を聴くようになった)こと」だと分かります。まとめると**「ぬきさしならないその歌を聴いていたときには気付かなかったものの、後になって振り返ればその歌に影響を受けていたのだ」というところまで読み込んでから、英訳に移ります。**

ちなみに英訳中の"at the time"は「当時は」という意味です。"at that time"も「その時」と「当時は」という意味を持ちますが、こちらはthatを使っているので指す時期が明確な時に使います。明確に指差して「この時」と言えるような場合ですね。今回は「『その』時」が明確ではないので、at the timeを使います。また、without recognition of Aで「Aに気付かず」という意味の表現です。

## 5 その歌だったのだ

「その歌だったのだと気付く。その歌が最初の歌だったのだと。」とあります。さて、「**その歌だったのだ**」が指す内容は何でしょう？ 省略を補ってその内容を考えると、「(最初の歌は)その歌だったのだ」だと分かります。その上でさらに、「その歌が最初の歌だったのだ」と続けているということは、情報として同じ内容

# 強者の戦略

を繰り返していることになり、重複情報になります。

では、重複情報になるのならば前半部の「その歌だったのだ」は削除してしまってもよいのでしょうか。結論から言うと、削除しても和文の情報は伝達できます。が、筆者がわざわざ繰り返している意図（あるいはニュアンスといべきでしょうか）までは訳出できません。レトリックに関する話になりますが、多くの場合、**繰り返しの目的は強調**になります。だから、文体論的に見れば、この部分の英訳では強調まで表現できてはじめてこの和文のニュアンスまで訳出できたことになります。

そこでどのように強調すればよいのか、という話になりますね。英訳例では"indeed"を使いました。**indeedは「本当に；実際に；確かに」**で覚えている単語だと思えますが、この語はいくつかの用法を持つので、それぞれの理解が必要です。そのうちの一つに、前文を受けてそれが**肯定であることの強調**をするものがあります。例えば、

1. "Do you remember her name?" —— "I do **indeed**."  
(「彼女の名前を覚えていますか」「ええ、確かに覚えていますよ」)
2. "Are you willing to help her?" —— "Yes **indeed**."  
(「彼女を手伝う気はありますか」「ええ、是非とも」)
3. "It's cold in here, isn't it?" —— "Oh, very cold **indeed**."  
(「ここって寒いね」「ええ、本当にとても寒いね」)

上記3例とも、indeedは前文の内容を受けて「**本当にそうだ**」という内容を受けています。1. だと「私は覚えているよ、本当にそうだよ。」というように、「覚えている」という**肯定的返答に念を押している**ことになり、肯定の答えを強調しています。これは Yes, I do. というのと実質内容は変わりませんが、indeedを使った方が強い肯定の気持を表現することができます。2. も肯定を強めています。Yesを強めて、「ええ、本当にそうですよ」と**彼女を手助けする意志を強く示しています**。3. ならば「ここは寒いね」という相手の発言に対して同じ形容詞を繰り返し、**同意を強調しています**。「ああ、とても寒いね、本当にそうだ」という意味合いになります。

さらに、上記1～3. の例では相手の発言に対する応答で indeed を使いましたが、他にも次のような例もあります。indeedを含む文自体の肯定性を強調しています。

4. That's a very good answer **indeed**. (本当にいい答えだ)
5. I think it's very good **indeed**. (それは本当に素晴らしいと思いますよ)
6. Your praise is a high honor, **indeed**. (お褒めのお言葉を頂き本当に光栄です)
7. **Indeed** he is old, but he is still healthy. (確かに彼は老齢だが、依然健康体である)

発想自体はここまで同じです。indeed 自体で「本当にそうだ」という念押しの繰り返しをしています。例えば4. では「それはとても良い答えだ、本当にそうだ」と発言に念押しをしています。この indeed は **veryの強調** として使われるものです。5. も同様で、「それはとてもいい、本当にそうだと思うよ」となり、veryをさらに強める言い方になります。この very をさらに強める用法では、**very ㊦ indeed / a very ㊦ ㊧ indeed / very ㊨ indeedの語順**で使います。6. でも「お褒めのお言葉を頂き光栄です、本当にそうです」という indeed の使い方です。それに対して7. であれば「彼が老齢である、本当にそうだ[確かに彼は老齢である]。しかし彼はまだ健全であるのだ」というように、彼が老齢であることに対して「それは肯定[確か]である」と念を押

# 強者の戦略

しているわけです。この indeed の用法は譲歩構文を作るもので、**It is true that** he is old, **but** ~を使って、ほぼ同意文として言い換えることができます。true も「本当だ、確かだ」という事実を肯定する意味合いを持ちますから、indeed「本当にそうだ」と **It is true that**「次のことは本当だ」が意味的に結びつくことには納得できると思います。※理論的にはほぼ同意、とすることになるのですが、実際の生きた英語として見た場合、**Indeed s'v'~but SV**の譲歩の方が堅い印象を与えます。それに対して **It is true that s'v' ~but SV**は口語的な印象があります。また、**It is true that** ~ but よりもさらにくだけた言い方に、**True, s'v'~, but SV**という形もあります。**It is true that**の true 1語を残す形になり、強者への道第12回における Top-down Approach 解答例でも、3つの内で一番くだけたこの **True, s'v'~, but SV**型の譲歩を使いました。「あなたの言っていることは~」におけるくだけた印象に適切な表現になります。

- |   |                       |
|---|-----------------------|
| 8. I am hungry; <b>indeed</b> , I am almost starving. | (お腹が空いた、いや実際は餓死寸前なんだ) |
| 9. He is a cautious man, <b>indeed</b> a timid one.   | (彼は用心深い男だ、いや実際は臆病な男だ) |

1.~7.の例文とは違う用法になります。8.と9.の indeed は **前言撤回の indeed**と言われ、8.では hungry を撤回して starving だと、9.では cautious を撤回して timid だと訂正しています。これらの indeed は「(いや)本当(のところ)はそうだ」という意味で「それどころか」で言い換えられます。この「いや」という否定的な意味は前後の文の内容での言い直しに由来するものなので、indeed 自体に「いや」という意味があるわけではありません。indeed 自体はやはり「本当のところは」というように、「**肯定であるのは~**」という**事実的な内容を続けるために使われます**。8.では「私は空腹だった、いや、餓死寸前だった、本当のところはそうだ」という意味、9.では「彼は慎重な人だ、いや、臆病な人だ、本当のところはそうだ」というように、それぞれの前言を撤回して、本当のところを明確にする時にも用います。indeed は **肯定の強調**と **前言撤回**という、一見まったく異なる用法を持っているかのような単語ですが、基本発想は同じです。この強調と前言撤回の識別のポイントは、indeed が **前文の情報の繰り返しに付いている場合は肯定の強調**であり、**前文とは異なる情報に言い換えている場合は前言の撤回**ということになります。

さて、和文を次のように言い換えて、英訳のベースを作っています。

- |  |
|--|
| <p><u>その歌だったのだ</u>と気付く。<u>その歌が最初の歌だったのだ</u>と。<br/>→ <u>(最初の歌は)その歌だったのだ</u>、<u>その歌が最初の歌だったのだ</u>と気付いた。<br/>→ <u>最初の歌はその歌だった</u>、<u>本当にそうだ</u>と気付いた。<br/>※「最初の歌」とは「ぬきさしならない歌」のことです</p> |
|--|

ここまで言い換えて、肯定であることの強調をする indeed に持ち込んでいます。和文内の繰り返しを持つ、強調のニュアンスまで出そうとすればこのようになります。全体として、"it was indeed the one with which I had made the first step"としました。「それは私が最初の一步を共に踏み出した歌だった、本当にそうだ」という形で indeed に物を言わせています。

indeed のみならず、強調語を使いこなせた英作文は絶妙な奥ゆかしさを感じさせます。ハイレベルではありますが、これを手に入れば強力な武器になります。

# 強者の戦略

## 6 それからずっと

「それからずっと」とは「**抜き差しならない歌に影響を受けた時からずっと**」と読みとれます。継続的に聴き続けてきていることを考えて、完了形を用います。もちろん仮定法は使いますが、**might have been listening** という形で完了進行形にしています。**動作がある期間継続しているような状況なので、完了進行形**を用います。これだけでも十分「それからずっと」という意味は出ますが、修飾語として **ever since** 「**それ以来ずっと**」を添えるとより和文に忠実に英訳できると思います。

## 7 同時代の

「同時代の」と見た時に、“**contemporary**”が思い浮かびましたね。ただ、そこでふと思い止まり、contemporary で大丈夫だろうか、という気持ちが湧いてきます。何となく「本当にここで使えるのかな」と思える単語ではないでしょうか。おそらくその「何となく」の原因は contemporary と言えば「同時代の；現代の」と単語帳で機械的に暗記したけれども使ったことがない、だから「本当にここで使えるのかな」と感じた。そうではないでしょうか？

結論的に言えばここは contemporary で大丈夫です。contemporary は自分が今を過ごしているのと「同時代」を表します。次のようなことを耳にしたことがあるのではないのでしょうか。私たちにとっての 2010 年は「現代」です。しかし 1980 年に生きていた人にとって「現代」とは 1980 年のことです。1960 年に生きていた人にとっての「現代」は 1960 年のこと。つまり、「**現代**」とは〇〇年という**決まった数値ではなく、時代を捉える人と共に変動する性質を持った時期**のことです。例えば筆者が、1960 年代に初めて「抜き差しならない歌」を聴いたとして、その時代の音楽を聴いていた。当時の筆者にとって 1960 年は現代です。時代が下って 1980 年の音楽を聴いていたとすると、1980 年当時に流行っていた歌も筆者にとっての「現代」の歌だったこととなります。「同時代の」という表現がこのような概念で使われますから、“contemporary American songs”がそれぞれの「現代の」歌であり、筆者が生きたのと「同時代」の歌であるのです。contemporary とはこのようなイメージを持つ単語です。

※ただし、「現代」の定義の一つに、例えば日本においては第二次世界大戦の敗戦以後の歴史的区分を「現代」と定義することもあります。ここで問題になっている「現代」とは別の定義と考えてください。

## 8 あるいはなかったかもしれない

「あるいは」という部分をどう表現しましたか？ さすがに "Had I not come across that song, **or** I might ~" などと、いきなり "or" を使うのはまずいので、別の手段を考えます。「あるいは」を言い換えて、「ひょっとすると」くらいで言い換えられれば、“perhaps” が思いついたかもしれません。しかし、助動詞 may を使う場合には、その may の中に「ひょっとすると」の意味が含まれるので、Perhaps ~ may は冗長な印象を与えてしまいます。日本語で言うところの「頭痛が痛い」表現ですね。この表現は避けるべきなので、この「あるいは」には perhaps を使わずにその意味を may[might] に取り込んでしまうことにします。

# 強者の戦略

## 後書き

模範的な英作文からその良さを味わう。解答例を単に覚えるだけではなく、良質な英作文ではどのような工夫がなされているのかを探る。これが英作文上達のポイントだと記したことがありました。着実に強者への道を極めていってください。まだまだ学べることはたくさんあるはず。良いものに触れ、その良さを味わってください。

今回で当面、僕の記事は終わりということになりますが、またご縁があれば登場したいと思います。皆さんが英語にますます好奇心をもって、素晴らしい作品が織り上げられた時の自分に恍惚とできる瞬間を手にしていてもらいたいと思います。また授業でお会いする人はその時にお会いしましょう。研伸館英語科の上本でした。